

A study of the japanese poet OHKUBO Shibutsu 大窪詩佛's Compiling Anthorogy "Suiyuan Nudizi Shixuanxuan 隨園女弟子詩選選"

蕭, 燕婉
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9617>

出版情報：中国文学論集. 31, pp.60-77, 2002-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



日本に紹介された『随園女弟子詩選選』について

蕭 燕 婉

はじめに

清の女流詩人蔡紫瓊は、『花鳳楼吟稿』（『國朝閨閣詩鈔』第十冊）の「書随園女弟子詩後」の中で、「競繡袁絲色色鮮、裒將佳句入新編、名園韻事真千古、愧我遲生四十年」（競いて袁絲を繡い、色色鮮やかなり、裒めて佳句を將て新編に入る、名園の韻事は真に千古、愧づらくは私の生に遅ること四十年なるを）と述べている。彼女は『随園女弟子詩選』を読んで、袁枚と女弟子の関係のあり方や、当時の風流韻事などに、並々ならぬ羨望の気持ちを生じていたのである。

『随園女弟子詩選』は、ただ中国のみならず、江戸時代の日本においても少なからぬ漢詩人に受容されて愛好された。袁枚の『随園女弟子詩選』は、大窪詩佛の手により『随園女弟子詩選選』として再編集され、文政十三年（一八三〇）五月、大坂と東都（江戸）の書肆から出版されている。

また、大窪詩佛はかつて新版の『随園女弟子詩選選』を友人の頼山陽に贈ったが、頼山陽はこれを「丁度貴処に有之てよろしきもの故呈上候」（天保元年（一八三〇）十二月二十一日付山陽書簡）と、彼の女弟子江馬細香に贈っている。このエピソードによれば、『随園女弟子詩選』に高い関心を示していたのは江戸時代の男性詩人ばかりではなく、女流詩人もこれを愛読していたのであり、当時の文壇に与えた影響の大きさが窺える。

そこで小論では、『随園女弟子研究の一環として、大窪詩佛編の『随園女弟子詩選選』を紹介すると共に、袁枚と

大窪詩佛の二人が詩を評価する際の基準に差異が有るか否かについて検討したい。更に江戸時代における『随園女弟子詩選選』の受容の状況を通して、随園女弟子評価の一隅をも照射することとしたい。

一

大窪詩佛（一七六七～一八三七）、名は行、字は天民。詩佛・柳埤・瘦梅・江山翁などと号した。常陸（茨城県）の生まれ。江戸で江湖詩派の領袖市河寛斎に学んだ。市河寛斎（一七四九～一八〇〇）は、文化十一（一八一四）年、長崎への出張中に手に入れた袁枚『小倉山房詩集』三十一巻を抄録し、同十三年に（一八一六）『随園詩鈔』六巻として出版し、江戸時代の文壇に紹介している。

衆知の通り、江戸幕府は鎖国政策をとっていたとは言え、長崎には年々清の商船が来航し、貿易が行われていた。書籍はなかでも主要な貿易品の一つであった。先に述べた『小倉山房詩集』だけではなく、『随園詩話』も正編十六巻が寛政三年（一七九一）に長崎にもたらされている。よって多くの日本人が袁枚の作品を熟知しており、その「性靈」を標榜する文学主張が当時の日本の文壇に非常な勢いで流行していたことは、疑いのない事実である。こうした江湖詩社における袁枚傾倒の雰囲気考慮に入れるならば、大窪詩佛が嘉慶元年（一七九六）刊の『随園詩女弟子詩選』に着目し、それを再編集して世に問うた理由としては、時代の好尚に合わせたものとまずは考えられるが、『随園詩女弟子詩選』自体のもつ魅力ということも十分に考慮されねばならない。

『和刻本漢詩集成』に収められている長澤規矩也の解題によれば、大窪詩佛編の『随園女弟子詩選選』の版本としては、文政十三年（一八三〇）の刊本があるほかに、また天保十五年（一八四四）大坂藤屋善七の後印本があるという。文政十三年版は早稲田大学、天保十五年版は内閣文庫に所蔵されている。

では、『随園女弟子詩選』はいったいどのようなルートを通して、大窪詩佛の手に入ったのだろうか。大庭脩の『江戸時代における唐船持渡書の研究』には、『随園女弟子詩選』という書名は見当たらない。しかし、『随園女弟子詩選』は『随園三十種』に収録されており、これは大庭氏の前掲書を繙けば、天保十二年（一八四一）に日本に

日本に紹介された『随園女弟子詩選選』について

渡来していたことが分かる。

しかしここに疑問が生じる。長崎経由での書籍輸入を記録した、現存する書籍元帳や入札帳が示す『隨園三十種』の日本伝来より前に、『隨園女弟子詩選』がすでに編集されていたのはなぜであろうか。

これには以下のような二つの可能性が考えられる。一つは、本当は『隨園女弟子詩選』は文政十三年（一八三〇）より前に日本に舶載されていたのだが、それを記録した帳簿類が失われてしまった、という可能性である。もう一つは、『隨園女弟子詩選』は個人により中国から持ち込まれたか、或いは江戸や京都の坊間の本屋によって購入されたという可能性である。

『隨園女弟子詩選』の編纂の際には、碓井歆と福田廷芳との二人が校正の仕事を担当している。またその冒頭に大窪詩佛は自作の三首の題辭を載せているが、その一では「数卷新詩門麗華、深紅淺碧各堪誇。金針巧繡宜男草、玉指故挑求子花」（数卷の新詩は麗華を鬥わせ、深紅 淺碧 各おの誇るに堪う。金針 巧みに繡う 宜男草、玉指 故らに挑む 求子花）と詠っている。

宜男草とはわずれぐさであり、めでたい草であるため、晋の周處編の『風土記』によれば、妊娠した婦女がこの草を身につけると男の子が産まれるという。この詩の内容は、輝かしい優美な詩を作りつつ、妻や母としての務めをも果たした袁枚の女弟子たちを高く評価すると共に、大窪詩佛の理想の女性像をも浮かび上がらせるものである。その二では、

句句讀來才氣饒 句句 読み来れば 才氣 饒かなり
 篇篇足吟比瓊瑤 篇篇 吟ずるに足りて 瓊瑤に比す

織織女手何精巧 織織たる女手 何ぞ精巧なる

織出鮫人五色綃 織り出す 鮫人の五色の綃

と詠っている。

晋の張華の『博物志』によれば、「鮫綃」とは南海に住む人魚が織るといふ薄絹である。水に入れても濡れない、相当高価で珍しいものである。ここでの鮫綃とは、女弟子たちの詩が極めて貴重なものであり、再三の吟詠に値す

ることの譬えになつている。
またその三には、

倉山老叟據詩壇 倉山の老叟、詩壇に據り

閨秀才峯爭榮勲 閨秀の才峯、榮勲を争う

若非天寶風流陣 若し天寶の風流陣に非ざれば

便是平陽娘子軍 便是是れ平陽の娘子軍

とある。「天寶風流陣」とは、唐の天寶年間に活躍した、自由奔放な精神に富んだ多くの女流詩人を指す。平陽娘子軍とは唐の高祖の三女平陽公主のことである。彼女は高祖の大唐建国の偉業を助け、赫々たる戦功をあげた女英雄として、よく知られている。

題辞のその三には、開放的な雰囲気なかで、文人墨客と詩の応酬を行う才気に溢れた女性たちに対する大窪詩佛の傾倒・思慕の情が読み取れる。恐らくそうした自由な精神の女性たちとの対等の交際に憧れたからこそ、大窪詩佛は『随園女弟子詩選』を広く日本に紹介しようとしたのではなからうか。一方、袁枚女弟子たちの詩に強い感銘を受け、大いに称賛している大窪詩佛の姿勢からは、当時の江戸文壇にも女性³が詩を作る風潮が蔚然として起りはじめていたか、あるいはすでにこうした風潮が存在していたことが推測される。

二

次に『随園女弟子詩選』と『随園女弟子詩選選』のそれぞれの構成について見てみよう。なお使用した底本は、以下の通りである。

『随園女弟子詩選』 六卷 清刊 (九州大学図書館蔵本)

『随園女弟子詩選選』 二卷 文政十三年刊 (汲古書院『和刻本漢詩集成』所収)

日本に紹介された『随園女弟子詩選選』について

『隨園女弟子詩選』六卷の構成

『隨園女弟子詩選選』二卷の構成

卷一	席佩蘭	孫雲鳳	卷上	席佩蘭	孫雲鳳
二	金逸		金逸	駱綺蘭	
三	駱綺蘭	張玉珍	張玉珍	嚴蕊珠	
	孫雲鶴	寥雲錦	王玉如		
四	陳長生	嚴蕊珠	卷下	寥雲錦	孫雲鶴
	陳淑蘭	王碧珠	陳長生	錢琳	
五	王倩	張絢霄	陳淑蘭	王碧珠	
	戴蘭英	屈秉筠	朱意珠	鮑之蕙	
六	歸懋儀	吳瓊仙	王倩	盧元素	
	汪玉軫	鮑尊古	戴蘭英	吳瓊仙	
					王蕙卿

通行本（『隨園三十種』本など）の『隨園女弟子詩選』には二十八人の女弟子の名が記されているが、作者名の右に線を引いた九人は、ただ名前を存するのみで、何らかの理由でその詩は収められていない。そのため、一八三〇年に大窪詩佛が出版した『隨園女弟子詩選選』二巻では、すでに名のみ存する九人を削除している。また大窪詩佛は、もともと巻三に収録されていた寥雲錦・孫雲鶴と、巻四の嚴蕊珠・王玉如との順序を入れ換えている。そもそも袁枚の『隨園女弟子詩選』の配列は、優劣を示したものではない。いったい、大窪詩佛はいかなる理由でその配列を少し変えているのか。『隨園女弟子詩選選』には序文や凡例がないため、その編纂方針について、確かなことは不明である。袁枚編の『隨園女弟子詩選』は、実は女弟子たちの作った詩だけでなく、詞と雜文をも多く収録している。これに対して『隨園女弟子詩選選』に収録されているのは詩のみであり、しかも孫雲鶴の「山行」が六言絶句である以外は、全て五・七言の律詩と絶句の近体詩であり、古體詩は全く含まれていない。

袁枚女弟子たちは主として詩によって有名なものではあるが、そのほか詞にも堪能であり、散文の造詣も高く、多方面に才能を示した人が少なくない。清代は詞の復興期とも言われており、また清の中期以降には、駢文の作者として有名な人物が続出している。袁枚も優れた駢文作家の一人であった。ある意味では『隨園女弟子詩選』そのものが、清の閨秀詩人による詩・詞・散文など様々な文学ジャンルにおける突出した業績を、全面的且つ具体的に反映したものと見えよう。

一方、詞は日本人にとっては、近体詩や古詩以上に難しい韻文形式で、江戸時代においても、一部の漢詩人たちが試みただけで、あまり一般化はしなかった。また、『隨園女弟子詩選』に収められている散文は殆ど四六駢体文で、その内容は概ね袁枚との交流を語ったものではあるが、難解な典故を多用し、抽象的な内容が多く、やや馴染みにくいと感じさせるものである。恐らく、日本の文人たちにとって親しみやすいものにするために、大窪詩佛は作品的な価値では劣らない詞や散文をあえて割愛したものと思われる。

三

袁枚の女弟子には席佩蘭・金逸・嚴蕊珠の「閨中三大知己」がいたが、その三人の中で彼が最も高く評価していたのは、その詩を「本朝第一」とまで賞賛した席佩蘭であった。では、大窪詩佛は『隨園女弟子詩選』を読んで、袁枚と同様に、席佩蘭の詩が最も優れていると評価したのだろうか。

まず、『隨園女弟子詩選』における、席佩蘭・金逸の詩の収録状況をみてみよう。席佩蘭と嚴蕊珠の比較については、またの機会に述べることとしたい。袁枚の『隨園女弟子詩選』の中には、席佩蘭の詩が八十二首収められている。大窪詩佛はその中から三十五首の詩を選んでいる。選ばれたのは全体の約四十二パーセントである。一方、『隨園女弟子詩選』中に金逸の詩は百十首存するが、大窪詩佛はその中から八十三首を選んでいる。その選ばれた比率は七十五パーセントに近く、席佩蘭より遙かに多いことは明らかである。

江戸時代の漢詩人は訓点を施された『隨園女弟子詩選』を通して、袁枚の女弟子たちの詩を理解したはずであ

る。『隨園女弟子詩選選』を読んだ頼山陽は、かつて自らを袁枚に比し、女弟子江馬細香を金逸に準えている⁽⁶⁾。大窪詩佛の席佩蘭と金逸の詩に対する選択傾向や、頼山陽の心に与えた金逸のイメージの強さからみれば、どうやら金逸の詩は席佩蘭よりも日本人の心を捉えたように思われる。したがって、袁枚と大窪詩佛の二人が詩を評価する際の基準は、恐らく違っていたのではないかと推測される。

以下に、『隨園女弟子詩選』より大窪詩佛が席佩蘭と金逸の詩を抄出した情況を図示して見ることにしよう。

『隨園女弟子詩選選』 席佩蘭詩所収状況表

(同じ詩題で一首以上の詩が書かれる場合があるので、この図に示す数字は、前掲の詩の数と一致しないことになる。) をつけたのは、収録された詩である。

1 刺繡	2 月夜	3 柳絮
4 思親	5 同外作	6 惜別
7 聞鐘	8 送春	9 寄衣曲
10 商婦曲	11 望外逾期不歸	12 喜外竟歸
13 感燕逾於舊壘	14 登陸	15 曲阜
16 曉行觀日出	17 除夕	18 夫子報罷歸、詩以慰之
19 南歸日題上黨郡署壁	20 三橋春遊曲	21 楊花
22 茉莉	23 題海棠冊子	24 織女嘆
25 夜坐	26 斷腸辭	27 己酉三月三日葬阿安…
28 暮春	29 蟬聲	30 潘妃
31 夏夜示外	32 上袁簡齋先生	33 謝竹橋禮部為序、長真閣詩
34 題薔薇便面	35 以指甲贈外	36 新年雪
37 春夜月	38 古鏡	39 賣花聲
40 十四夜月	41 十五夜月	42 白蓮
43 桐葉落	44 送外入都	45 病懷二首
46 送侄婦謝翠霞歸寧	47 以詩壽隨園夫子蒙束縑之報…	48 三月三日夫子來虞山
49 賀隨園夫子八十壽詩原韻十首		

『隨園女弟子詩選選』 金逸詩所収狀況表

1 擬柳州「雨後曉行、獨至愚溪北池」	2 和竹士「曉遊鄧尉作」	3 初夏
4 栽衣曲	5 雪後佇竹士歸	6 胥口曉發
7 隨園先生來吳門招集女弟子于繡閣…	8 病起	9 綠窗
10 曉起即事	11 采蓮曲	12 曉起桂花下作
13 一梧齋與竹士夜談去後作	14 偕竹士聯句論詩	15 秋詞
16 次竹士韻	17 題吳玉澗太史除夕四客游山圖	18 竹士同作
19 竹士以勉耘齋席上同人分韻詩索和…	20 歲暮張子白進士過訪竹士	21 寒夜待竹士不歸、讀紅樓夢傳奇有作
22 題許儼瓊女史薈餘小草	23 補和方大章胡眉峰	24 與姐別後頗無意緒、感舊述懷…
25 次韻胡石蘭女史四絕 惜花春起早	26 玩月夜眠遲	27 掬水月在手
28 弄花香滿衣	29 春寒	30 月夜
31 吳素雲女士寫秋芳圖、…	32 素雲女士為其兄蘭雪畫杏花雙燕圖	33 讀「香蘇山館集」
34 喜簡齋夫子枉過里門奉呈	35 記夢	36 次韻李石桐山人夜坐聞遠水聲
37 柘塘春步	38 烟隴探梅	39 過朱家園有作
40 秋日有懷王碧雲	41 舟中即目	42 秋閨漫興
43 登樓	44 書懷呈竹士	45 靜綠軒夜坐
46 中秋夜雨後得月	47 牡丹	48 西溪舟次
49 東塔院題壁	50 暮春偕竹士遊塔影園	51 舟過冶坊浜有見
52 曉起	53 病中得頰伽贈詩并讀近作	54 次前韻即送郭頰伽、蔣伯生之淮上
55 頰伽、伯生兩生復疊前韻訊病…	56 奉答嚴歷亭司馬贈詩、仍用前韻	57 題汪宜秋玉珍內史詩稿後
58 酬朱鐵門見贈之作	59 六月十五日、竹士為余買藥吳江	60 春日雜題
61 代簡答閩中諸子	62 題王月函姪夫人蟾影天香小照	63 次韻和吳蘭雪「石溪觀桃花」
64 酬謝蘊山觀察兼呈雲卿夫人	65 題周湘花女史繡蕙風夫人…	66 次韻蘭雪訊病之作
67 次韻酬蘭雪再贈詩、…	68 題「香蘇山館圖」	69 聯句次韻和劉松嵐明府與蘭雪游靈岩
70 聯句	71 秋夜聯句	72 閩中雜咏

日本に紹介された『隨園女弟子詩選選』について

73題「惜花圖」二絶為王子乗作	74秋日答武林顧虹橋茂才	75寄懷宜秋院主
76靜綠軒夜話同竹土作		

詩の選考としては、まず女流詩人なり妻なりの生き生きとした心情を窺わせる、家庭生活をリアルに描写した詩が多く選録されているようである。次に席佩蘭と金逸が袁枚との交際の様子を綴った詩、或いは金逸のそのような、袁枚以外の男性文人と自由に酬唱した詩も積極的に採られていると思われる。

大窪詩佛はかつて『放翁先生詩鈔』・『宋詩礎』・『宋三大家絶句』を編纂したことがある⁷⁾。彼の詩は、主として袁枚の「性靈派」や南宋三大家の楊萬里・范成大・陸游のような、個人的な感情や身近な事柄を題材とする作風の詩に学んだものである。そうした詩風の影響下にあった彼が、『隨園女弟子詩選』の中からトリビアルな家庭生活の詩を好んで取ったのは当然であろう。つまり、『隨園女弟子詩選』の編集は、大窪詩佛自身の文学主張をかなりの程度反映していると言える。

では、袁枚と大窪詩佛との詩の評価の基準はどこが違っているのであらうか。この問題を検討するためには、まず席佩蘭と金逸の詩風を比較してみなければならぬ。

席佩蘭の詩には、夫婦間の愛情を婉曲に述べた個人的細叙風の詩もあれば、実は格調高い堂々たる詩もあつた。ここで大窪詩佛が選んでいない「織女嘆」(『隨園女弟子詩選』卷一)を掲げてみよう。

秋月已如雪	秋月 已に雪の如く
秋風已如鐵	秋風 已に鐵の如し
孤燈耿寒機	孤燈 寒機耿たり
有女當窗織	女有りて窓に當りて織る
廢我一宵眼	我が一宵の眼を廢し
看絲乍盈尺	絲を見るに 乍ち尺に盈つ
廢我一宵眼	我が一宵の眼を廢し

看絲不成匹

絲を看るに 匹を成さず

豈不畏龜手

豈に龜手を畏れざらんや

此心凜無逸

此の心 凜として逸無し

昨日入城提蟹筐

昨日 城に入り 蟹筐を提ぐ

東隣嫁女耀豐妝

東隣の嫁女は豐妝耀き

彩幣百千束

彩幣 百千束

綺羅十二箱

綺羅 十二箱

龍章象服何煌煌

龍章 象服 何ぞ煌煌たる

平生不識蠶與桑

平生 蠶と桑とを識らず

歸來泣對機中錦

歸り來り 泣きて對す 機中の錦

知與誰人作嫁裳

知んぬ 誰人の與にか嫁裳を作る

抽刀斷機不如寢

刀を抽き 機を断つは寝ぬるに如かず

又聽絡緯啼金井

又聽く 絡緯の金井に啼くを

詩中、「印を施したのは、換韻の箇所である。この詩は、働かずして豪奢な生活を送っていた東隣女と対照することによって、織女の貧困な境遇を際立たせている。織女に対する深い同情を率直に述べ、その表現には飾り気がない。また、詩中の錯綜変化する音調や韻律といったさまざまなリズムは作者の感情の起伏に対応しており、文字に随って音の響きが流れ出ている。まさに袁枚の「字字出於性靈、不拾古人牙慧、而能天機清妙、音節琮琤」(「字字、性靈より出で、古人の牙慧を拾わずして、能く天機清妙にして、音節琮琤たり」)(『長真閣集』序文)という評言の通りである。

以上のような詩を詠んだ席佩蘭の文学観・人間観の核心が「情の重視」にあることは明らかであるが、同時に彼女が自由で奔放な文学世界を追求していたことも伺えよう。次に、夫婦が閨房でひそやかに話しあう情景を詠んだ席佩蘭の「同外作」(『隨園女弟子詩選』巻一)を見てみよう。

日本に紹介された『隨園女弟子詩選』について

水沈添取博山温 水沈 添取す 博山の温

一院梨花深閉門 一院の梨花 深く門を閉す

燕子不來風正静 燕子 来らず 風 正に静かなり

小樓人語月黄昏 小樓に人語り 月黄昏

水沈は沈香の別名で、博山は香炉の名である。香炉から漂う縷縷たる香りは夫婦の温かい愛情の比喩ともなっている。この詩には、妻や夫の姿の具体的な描写がないが、却って嫋嫋たる情趣に富んでいる。夫婦間の愛情を含蓄深く描きながらも、清新の風韻が失われていない。

一方、多情多病の才女金逸の詩の題材は、殆どが病気の悩みや、愛にまつわる女性の苦しみと歎びとに限られている。例えば、「六月十五日、竹士爲余買藥吳江、漏三下不歸、挑燈愁坐、恍惚入夢」では、閨の中の寂しい女性の思いを次のように述べる。

遠夢知尋水上村 遠夢 尋ぬるを知る 水上の村

微雲淡淡雨昏昏 微雲 淡淡として 雨 昏昏たり

如何萬里關山隔 如何せん 萬里 關山の隔つるを

一夜相思已斷魂 一夜の相思 已に魂を断つ

夫との短い別離によつて、金逸は孤独に悩まされ、いつにもまして長い夜を過ごすやるせない相思の情を、詩の中に切々と吐露している。その惻々として憐れむべき哀婉にして繊細な詩情は、読者の胸にしみじみと感じられるのである。

金逸の詩は全体的に唯美的色彩が強く、濃厚な閨情が立ちこめているという印象を受ける。⁽⁸⁾ とりわけ夫に対する気持の細やかさや純粹な心情の描写は、あたかも近代の甘美な恋愛小説を読むような感を受ける。ただ、彼女の生活範囲が限られていたためか、繊細且つ巧緻を凝らした技巧によつて描写される題材は、私生活や自己の悲歎、眼前の景色などが中心であった。袁枚の金逸に対する評価は、彼女の詩に対するものというよりも、むしろ袁枚の詩への彼女の優れた理解力に対するものであったと見られる。⁽⁹⁾

金逸と対照させて、席佩蘭の詩を全体的にみると、その題材は多彩であり、叙情詩のほか、贈答、行旅、叙景なども含まれており、詩の風格もそれぞれ異なっている。しかも見識が広く、更に古体歌行をも得意としていたので、このような点で金逸は席佩蘭には及ばないところがあったと言えるだろう。

四

以上、席佩蘭と金逸の詩風それぞれの特色を明らかにしてきた。次に大窪詩佛と頼山陽が、殊に女性らしい繊細な表現に優れている金逸の詩を、どう評価したかについて検討してみよう。

まず頼山陽について見てみたい。頼山陽の詩や散文は、己れの内心を自由奔放に吐露したものであり、その觀察の鋭さと表現の犀利とによって、一代に抜きんでていた。彼はまた袁枚と同様積極的に知的女性と交際し、平田玉蘊・江馬細香・原采蘋・片山九畹などの女弟子を持つていた。

女流文学の理解者であった頼山陽は、女弟子たちを指導する際には、彼女らの作品を丁寧に添削し、評語までもも付している。そこから彼女らの習字の足跡を如実に窺うことができる。たとえば江馬細香の『湘夢遺稿』を繙けば、そこに頼山陽の評語を見ることができのだが、中でも特に注目に値するのは、極めて頻繁に現れる「真女郎詩絶佳」（真に女郎の詩なり、絶佳）や、これに類似した「真閨秀之語」（真に閨秀の語なり）などである。¹⁰

もう一人の女弟子原采蘋は、むしろより豁達でおおらかな詩風に憧れていたようだが、頼山陽は彼女の「歳晚即事」を読んで、「女子の詩目から宜しき所有り。它（他）篇往往にして丈夫（男性）の語に類す。此の詩の如きは然らず」と褒めている。¹¹

右に挙げた数例の評語から見て、女性らしいデリケートな表現の詩を山陽が高く評価していたことがわかる。これは彼に、清艶優美な詩を作る閨秀詩人を育成する意図があったことを示している。山陽の女流文学に関する主張がそのようなものであったとすれば、鋭敏な感受性と柔弱な風格とを具えた金逸の詩を、いかに彼が高く評価し、また最愛の女弟子江馬細香を、なぜ金逸に擬らえていたかも、もはや想像に難くないのである。

一方、席佩蘭は屢々「掃眉筆上無脂粉」(『長真閣詩集』卷三「題宛仙詩稿」)や「高情不作女郎詩」(『長真閣詩集』卷五「題歸佩珊繡餘詩稿」)といった言葉で、女性詩友の詩を賞賛している。以上のような評語からは、艶麗で柔弱の気味がある「女郎詩」や「脂粉氣」の詩を彼女が低く見ていたことを読み取れる。ここには、一読して直ちに女流詩人の手になるものと思われるような、艶麗な世界や花鳥風月を詠じたところの「女郎詩」の詩風から脱しようとする席佩蘭の文学主張が窺えるのである。¹²⁾ そもそも席佩蘭は群を抜いて理知的な女性であり、女性としての立場の限界を突破し、奔放な豪情を自由自在に文学の世界で表現することを求めていた。席佩蘭の作品、或いは彼女の詩友の作品に対する評価からみれば、その理想とする詩風は清新優美の中に豪放を兼ね具えたものだと考えられる。

女性が詩を詠つ場合、女性ならではの感性を發揮すべきだという頼山陽の主張は、もとより多くの女性たちに文学創作の自信を与えるものではある。しかし、ここにも男性と女性との葛藤の一端を見ることができるといえる。所謂女らしさとは、歴史的・社会的・文化的背景によつて規定されるものであり、少なくとも近現代以前においては、それは男性の主導権のものに決定されていたのである。「女」として書いてほしいという山陽の指導を受けた江馬細香ではあつたが、その詩風や生き方は次第により自由且つ豪放なものに変わり、男女の差を飛び越え、束縛されない自由な心情を率直で詠っていることによつて評価されている。¹³⁾

因みに頼山陽と同じ女流文学觀を持つ男性文人として、大窪詩佛の詩友菊池五山をも挙げる事ができる。菊池五山は『五山堂詩話』卷六に、次のような記述を残している。

有閨秀多田氏者、……、字季婉。誦書吟詩、極有青衿風。常愛讀資治通鑑、……、余遽取其集讀之、真女丈夫詩也、遂就中抄稍優柔者、以酬其意。

閨秀多田氏なる者有り、……、字は季婉。書を誦し、詩を吟じ、極めて青衿の風有り。常に資治通鑑を愛読す。……、余、遽にその集を取りて之を読むに、真に女丈夫の詩なり。遂に中に就きて稍や優柔なる者を抄して、以てその意に酬ゆ。

歴史書を愛読する季婉の書いた詩を「真女丈夫」のものだと称賛しつつも、『五山堂詩話』に収録するに際しては、

結局五山は女性らしい優柔の詩のみを選んでいるのである。

袁枚に憧れ、「景傲袁子才」（『詩聖堂詩集』山本北山の序）と称された大窪詩佛ではあつたが、袁枚や頼山陽のように自らが女弟子を持つには至らなかつた。また直接女流文学に触れた論評は非常に少ないため、彼が女流文学に対していかなる意見を抱いていたかを知ることが困難である。しかし『五山堂詩話』巻五の、彼が女流詩人文姫に詩を贈つた記事には、次のようにある。

比來閨秀鍾于北山先生一家、……女弟子文姬號小窓、聡慧能詩。摘句云：梅子欲肥先釀雨、竹孫稍長不禁風。

瓶花改換經旬水、綿服成裾連夜寒。皆嫺雅可愛。故詩佛贈詩云：莫把清愁吟向天、人間謫墮有深緣、如今誰恠香薰骨、元是玉皇前殿仙。

比來、閨秀、北山先生の一家に鍾る。……女弟子文姬、小窓と号す。聡慧にして、詩を能くす。摘句に云く、

梅子肥えんと欲して先ず雨を釀し、竹孫稍や長じて風に禁えず。瓶花 改めて換う 経旬の水、綿服 成りて裾う 連夜の寒と。皆嫺雅愛すべし。故に詩佛、詩を贈りて云く、清愁を把つて吟じて天に向うこと莫れ、人間の謫墮深縁有り。如今 誰か恠しまん 香 骨を薰するを、元は是れ玉皇前殿の仙。

文姫への敬慕の情を詠つたこの詩において、「人間謫墮有深縁」という表現や、文姫の前身は天帝に仕える仙女であつたと言っているのは、明清時代の仙女崇拜文学の影響を受けたものであるか、あるいは一途に愛の世界に身を捧げた才女金逸が夭折した時に沈散花が書いた挽詩「侍書月殿可微寒」（月殿に待書たりて 微かに寒かるべきか）（『隨園女弟子詩選』巻二）を意識したものだと思われる。したがって、文姫の楚楚たる詩情を称えた大窪詩佛の詩や、彼と親交のあつた頼山陽や菊池五山の女流文学観からみれば、『隨園女弟子詩選選』における詩佛の席佩蘭と金逸の詩に対する選詩の偏向が、それぞれに対する評価のあらわれであつたことは間違いないであらう。そして、金逸の抒情詩に対する傾倒の強さが示しているような私生活の描寫・述懐咏嘆に対する選詩の愛好によつて、結局醇朴な行旅、詠事の詩や或いは諷諭詩などは、『隨園女弟子詩選選』の中では淘汰されることとなつたのである。

終わりに

以上、小論では『隨園女弟子詩選』が嘉慶元年に中国で刊行されて以来の、日本への流通のプロセス、及び受容者側の事情を中心に検討してきた。昔から日本と中国とは、文化の上で特に密接な関係があった。衆知の如く、江戸時代の日本の文人は、中国の詩文を読み、書画を愛し、中国文化に非常に傾倒していた。そして、年々書籍の流通が頻繁に行われる中、明末以来の中国の女流文学の隆盛にもなつて、日本に舶載される書籍はつとに男性文人の著作のみにとどまらず、女流詩人の作品集も続々と輸入されていた。例えば、明の徐媛著の『絳緯吟』、明末鍾惺編の『名媛詩歸』、明末清初の周之標編輯の『女中七才子』が続々と流入し、和刻されていった。

多様な魅力に富んだ中国女流文学、そして文学に没頭する中国女性の姿は、日本に紹介されると間もなく、当時の日本の文壇や知的女性に大きな刺激を与えたようである。その結果、漢詩文を学ぶ日本の女性と、それを奨励する男性文人とが徐々に現れると共に、文壇における女流詩人に関する記事や話題も次第に豊富になっていった。こうした女流文学の勃興期に、大窪詩佛によつて再編集された『隨園女弟子詩選』が刊行されたのは、当時の文学風潮からしても、まことに時宜に適つた快挙であつたと言える。

この『詩選選』によつて、「女弟子」という言葉は、新鮮な魅力を以て当時の日本漢詩人たちの耳に響いたのであろう。高い人気のおつた詩人頼山陽は、精神の自由を重視した袁枚を意識して、「女弟子」の存在を誇示し、同時代の捉われた女性観に対して果敢な挑戦を試みた。袁枚と頼山陽二人の文人の姿は、極めて鮮明でありまた互いに彷彿しあうものでもある。

のみならず、袁枚と女弟子たちの師弟関係のあり方までも、江戸時代の日本に受け継がれているのである。江戸期日本の女流詩人は、父母の理解のもとでよき指導者に巡り会い、真剣に文学創作に取り組み、ついには日本の女流文芸も、清代の中国と同じく一時的な隆盛を迎えることとなった。したがって、『隨園女弟子詩選』は日本に紹介されることによつて、日本の女流文学の勃興を強力に促進したと考えられるのである。その意味で、『隨園女弟子

詩選』は、女流文学發展史上逸することのできない重要な書物として再評価される必要がある。更に、日中文化交流史上における大窪詩佛の重大な功績も、決して無視することはできない。

小論の考察を進める中で、『隨園女弟子詩選』の再編集にあたって、大窪詩佛はとりわけ金逸の詩を優先的に紹介していたことが明らかになった。ゆえに、繊細優美な金逸の作品や彼女の薄命な生涯は、中国で女弟子の筆頭と見られていた席佩蘭よりも、日本ではよく知られていたという興味深い現象が起っている。この文学の受容過程で生じた些かの差異は、日本の文学者の時代的要求・愛好を反映すると同時に、かなりの程度大窪詩佛個人の女流文学観や興味などに左右されたものと考えられる。しかし、「女性らしい」詩を作るように求められた日本の女流詩人は、やはりこの枠を越え、女性自身の観点から女性であることの意味を根源的に問いなおそうとする詩作や行動を試みたのである。

総じて言えば、乾嘉期の清と江戸期の日本には、政治体制や社会構造などのさまざまな相違にもかかわらず、いくつかの共通する文化状況が顕著に存在していたと考えられる。また、この文化状況の背後に存在する社会の気風、例えば商業の空前の繁栄や都市の消費生活の発達、教育の普及による識字率の上昇なども、中日両国に共通するものであった。

最後に注意を促しておきたいが、中国と日本の文学的交流は、中国から日本への一方的な輸出入のみであったのではない。かつて岸田吟香（一八三三—一九〇五）は清末の考証学者俞樾に『東瀛詩選』の編集を依頼している。一八八二年に『東瀛詩選』の編纂は終わったが、閨秀の部に当てられた巻四十の中では、中国の女流文学を受容して才能を開花させた江馬細香・原采蘋などの作品が初めて中国に紹介された。このような近世の中国と日本における書籍流通と文学・思想との相互関係の全体的把握は、今後の我々に残された大きな課題である。

注

- (1) 市河寛齋による『隨園詩鈔』の鈔出の方法、及び選詩の基準については、竹村則行「袁枚と白居易が詠んだ杭州西湖 日本に紹介された『隨園女弟子詩選選』について

- 詩」に論じられている（『東洋の知識人』朋友書店 平成七年 所収）。
- (2) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』『商舶載來書目』七三九頁参照（関西大学出版部）。
- (3) 『隨園詩話』の影響を受けて、菊池五山（一七七二—一八五五）が著した『五山堂詩話』の巻二には「余每逢閩秀詩必抄存以廣流傳、東湖有女弟子林氏文鳳者、……」とある。また、『五山堂詩話』全十五巻の中には、十五名、三十七首の女流詩人の詩が載録されている。以上、揖斐高『江戸詩壇ジャーナリズム』を参照（角川書店 平成十三年）。
- (4) 日本人による詞の創作については、神田喜一郎の『日本填詞史話』に詳しい（『神田喜一郎全集』第六巻 昭和六十年）。
- (5) 『隨園詩話補遺』巻十の四十一に「余女弟子雖二十餘人、而如蕊珠之博雅、金織織之領解、席佩蘭之推尊本朝第一、皆閩中三大知己也」とある。陳文述『頤道堂外集』巻六「題席道華女士佩蘭長真閣詩卷」に「不愧袁絳稱第一、天人風貌謫仙才」とある。席佩蘭と金逸の生涯と文学については拙稿「閩秀詩人席佩蘭の文学——夫婦能詩を中心に」（『中国文学論集』第二十八号）、「清代の閩秀詩人金逸の生涯とその文学」（『九州中國會報』第三十八巻）参照。
- (6) 江馬細香「奉挽山陽先生」その三に「痴才弟子非金逸、授業先生是小倉」とある。同詩の注に「隨園女弟子詩選、新刻成る。小文を朱書して、余に賜つ。其の略に云つ、余も亦女弟子有り。弟子未だ必ずしも集中の数女に譲らず。其の師隨園の肩頂を望まずと雖も然れども此を以て差や顔頰す可し」とある（入谷仙介監修・門玲子訳注『江馬細香詩集』湘夢遺稿 上・下 汲古書院 一九九二）。
- (7) 一八〇一年に『放翁先生詩鈔』、一八〇三年に『宋詩礎』・『宋三大家絶句』を刊行。揖斐高著『江戸詩人選集』第五巻大窪詩佛年譜を参照（岩波書店 一九九〇年）。
- (8) 法式善著『梧門詩話』巻十六に「織織吳縣人、氏名名逸、……遺詩四百餘篇、哀艶凄響」とある。
- (9) 『隨園詩話補遺』巻十の二十九には「金織織女子詩才既佳、而神解尤超」とある。また、『小倉山房詩集』巻三十七「後知己詩—織織女子金逸」に「倘非絶代才、何由領玄妙」とある。
- (10) 江馬細香『湘夢遺稿』に「夏日偶作」詩に「真閩秀之詩」という評語がある。そのほかの類似する評語としては、「冬日偶題」の「風情悽惋、真是閩秀語」、「其夜宿淨林菴」の「真閩秀之語也」、「丙戌春日寓於淨林菴賞金谿桜花」

の「真閨閣之詩也」、「春日閨裏雜咏」の「真女郎詩」、がある（入谷仙介監修・門玲子訳注『江馬細香詩集』湘夢遺稿 上・下』汲古書院 一九九二）。

(11) 『江戸漢詩選3 女流』一七二頁参照（岩波書店 一九九五年）。

(12) 席佩蘭と同じく「女郎詩」、「脂粉氣」のある詩を貶する意見を表明した人は稀ではない。例えば、『名媛詩緯初編』の編集者明末の王端淑はそれぞれの女流詩人に対して次のような評語を残している。同書卷一正集「鑑氏」に「…何等家常大雅、毫無女郎習氣」とある。同書卷四正集一「朱應禎」に「…女子不能脫粉氣、自是沿習未除耳」とある。

同書卷五正集三「李玉英」に「女子不可作綺語艷辭、予已言之再四矣」とある。また清・蔣機秀選輯の『國朝名媛詩繡』五卷の例言に「兒女情不必無、脂粉氣特不可有」とある（胡文楷『歷代婦女著作考』九一三頁）。

(13) 入谷仙介監修・門玲子訳注『江馬細香詩集』湘夢遺稿 上・下』の解説に「フェミニズムの視点から見ると、山陽には細香を一つの形、山陽が理想とする清艶優美な詩を作る女流詩人に育てようという意図がある。細香もそのことをよく理解して努力しているが、最後まで自分本来の個性―蘭齋譲りの自主独立の気質、物事の本質に直接参入する気迫など―を失うことはなく、気宇の大きな、剛毅な詩をしばしば作るのである。」とある。

(14) 大窪詩佛の書いた詩とは彼の『詩聖堂詩集』巻五に収められた『讀閨秀文姫詩』である。

(15) 徐媛の『絡緯吟』は宝暦四年（一七五四）、天明六年（一七八六）に日本にもたらされている。鍾惺編の『名媛詩歸』は享保八年（一七二三）、天明六年（一七八六）に日本に輸入された記録がある。以上、大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』参照（関西大学出版部）。周之標編の『女中七才子』は、明和七年（一七七〇）京都梅村源二郎等の刊本がある。ただしその名は『明七才女詩集』と改められており、今は『和刻本漢詩集成総集篇』第七集に収録されている。